

日がさして来ました。私はまだ雨のあがりかけに雨外套をはおって町の郵便局まで行き、その帰りをいつも往来しているM旅館へ立寄り、帳場の隣り間で天候のはなしなどをしていました。いつもそこに座っている隠居のお婆さんは浦賀へ行ったとかで留守でしたので、若い主人とおかみさんとが居ただけでした。暫く話をして、もう帰ろうと思っている途端に、俄に地震が来ました。少々躊躇していた私たちは、それでも止みそうもないので、表の縁側のところまで立ってゆきました。主人も一緒でしたが、後からおかみさんも、立ちあがって

「瓦が落ちると危ない」

と声をかけるのを聞いているうちに、ひどい揺れが来たので、これは危険だと思って、その儘夢中に表へ飛び出しました。そのとき私には、どうしても不安で、そこに止っては居られなかったのです。表には一間半ばかりも先に石塀が囲んでいて、その右手に門があったのです。私たちは一目散に、その門から往来へ出ようと思いました。門の内側の敷石のあたりで転がされてしまいました。すぐ起き上ろうともがいても、どうしても立てません。そのうちに瓦が落ちる、石塀が壊れる、続いて今迄いた二階建の家がずしりと石塀の上に崩れ倒れてしまいました。私はそのとき

「これは大変な地震が来た。とんだことになってしまった」

と思つたのでした。ともかく起き上つては見たものの、まだ激しい揺れが来て立っていられません。よろよると往来の向う側の石垣に手をよりかけて身体を支えながら揺られていました。どこがどうなったやら判らず、只騒音に満ちた四方のなかに不安な思いをしていたに過ぎません。私のすぐ前には宿の女中の一人がやはり同じ様に石垣に倚りかかつて私を見て泣声を出しています。そうするうちに揺れが少々静まつたと思つて辺りを見ると、その辺の家は皆倒れてしまつて惨憺たる有様が見られます。私と一緒にとび出した宿の主人は眼の上を怪我して血をだらだらと垂らしています。多分石の門柱の折れて来たのに当たつたのでしよう。傷に手をあてながら家の下にはいつている人達を心配しています。唾の雇女が軒下に出られずにいるのが見えまして、その屋根をあげようとするが、なかなか上がりません。私も家の方がどうなったか心配になりましたが、それを見棄てるわけにはゆかないので、側にあつた棒切れを軒下に突っ込んで、梃子のようにして皆と力を合わせて上げましたら、その雇女は隙間から這い出すことが出来ました。まだおかみさんなどが出られなかつたと云うので、氣遣われましたが、その頃はだんだん人が集まつて屋根を除け始めましたので、私だけはともかく家の様子を見なくてはならぬと思つて、跣足でその儘駆け出しました。氣づいて見ると、眼鏡をどこかへ とぼしてしまつていたのでした。それでも怪我一つしなかつたことが寧ろ不思議に

思われるくらいです。家まで数町の間は多少の潰れ家もありましたが、残っている家が多いので、これなら多分よからうと推察しながらも、やはり大きな不安が止みませんでした。

町をはずれて小学校の近くへ来ると、私の家にいたK君に出遇ひました。

「大丈夫ですから、ご安心なさい」

と云う言葉を聞いて、やはり宜かったかと落ち着きを得ました。そして学校の前から小高い丘の上の赤瓦の屋根の無事な姿を見ると、有難いことであつたと云う感じが起りました。

学校のふとい石の門柱の一方は無惨に根元から折れ倒れて居り、校舎の一部は今にも倒れそうにひどく傾いているのでした。私はその傍の田圃路を通つて坂をのぼつて来ると、庭先に心配気に興奮して立っていたY子は「まあよかつた」と言う面持ちで迎えながら

「壁も何もすっかり落ちちやつたの、私、とても駄目だと思つて、この新しい家で自分一人で死ぬのかと覚悟したんでしたつけ」

と、それから早口にひどく揺れた有様やら何やら述べましたが、町の方の家が大分つぶれたと云う私の言葉を聞いて、意外な様に、そして驚怖の心を更に深くしたのでした。その間にも地面がひどく揺れて来ます。町の方からは半鐘が鳴りわたってくるので、火事ではないかと、また心配が増

しました。私の処でも丁度昼どきで石油焔炉を燃やしていたのですが、女中がそれを消して出たのだそうで、本当にいいことをしてくれたと思いました。

M旅館のおかみさんが屋根の下へつぶされて　どうなっ  
たかわからぬと云うと、Y子はそれを氣遣って　ともかく  
行って見ようと云うので、私も一緒に町へゆきかけました  
ら、向うから大勢の人達が続々とこちらへ歩いて来るので  
す。

「津波が来るっていう話です」

と、みんな恐怖を湛えて急いで逃げて来たのでした。M旅  
館の子どもたちも　そのなかに交っていて　Y子を見つけ  
て

「津波が来るから、これからお山へ逃げてゆくのに」

と云いますので、Y子はその子どもたちを伴って家へ戻り  
ました。私は一人して　もう一度M旅館までゆきましたが、  
おかみさんも多少の怪我だけで安全に救い出されたことを  
聞いて、安心して帰りました。

家へ戻ると、その山には　もう一杯に人々が充ちてい  
ました。蓆の上に座ったり、木の根に腰かけたりして、ま  
だ揺れ止まない地面を恐れているのです。頭や手足を負傷  
して血を流している人達が　かなりありました。Y子は家  
にあり合わせの薬や繃帯を取り出して手当していました。  
頑はない子どもたちは　お腹が空いたと言って泣き出すの  
もあります。女中に言いつけて　すぐに米を焚かせて　む

すびを作らせました。井戸水を汲むと すっかり白く濁つていました。山の上からは 隣り町の方に火事の煙が見えるのでした。この時分には すべてが緊張し切つて この未曾有な経験を語り合いながら、お互いの無事を祝するばかりでした。

午後の四時になると東の方から黒い雲が出て、今まで晴れわたっていた空を埋めてしまいました。驟雨が来るかも知れないと云うので大勢の避難の人達は丁度庭の真中に大工の遣い残したトタン小屋のあつたのに集つてしまいました。私たちは家の後ろに やはりトタン葺の物置小屋の半成なのがありましたので、そこへ這入りました。けれど暫くしても雨は来ずに、只その黒い雲が満天に拡がったままで、夕方迄動こうともしません。私はそのとき何だか これは妙な雲だと思いました。やがてだんだんに 四方の水平線に近いところだけの雲が切れて もう沈みそうな夕日とその僅かの晴れ間から射して来ますと、雲の下方の縁が真つ赤に染まつて眼にきらきらするのにな、頭の上に蟠まつている雲は いやいよ黒く低く私たちを圧しています。それは何と言うもの凄さでしたらう。死のような気味わるさ、本当に異常な地変の後を葬うような この夕空のもとに私たちは生きた心もないようにさえ感じました。

津浪の心配がまだ去らないので、私は浜辺まで様子を見にゆこうと思つて町を通ると、両側の家が倒れて足の踏み場がありません。屋根瓦のくずれた上を超えたりして暫く

行かれるだけです。海岸までに立っている家は一、二棟に過ぎないので、すぐそれを超えて海面が見亘されるのです。何と云う変り様かと思うとおのづから身慄ひさせられます。浜通りには道路の上にたくさん亀裂が出来ていました。その辺りで余震を感じると、足の下の地面がまるでふわふわと水にでも浮いている様にたよりない気がします。鋸で家の梁を挽いて押しつぶされた人を出そうとしているのや、圧死者を戸板へ載せて運んでゆくのを、そう云う惨ましい光景が夕暗のもの凄さを増しています。それでも黒い雲の下から僅かに怪しげに夕光がさしているのは何と云う気味わるさでしたらう。私は大急ぎでまた家へ帰って来ました。

夜に這入ってから例の黒い雲は幾分消えてゆきましたが、遠く南方の山を超えて空が真赤に染まっていました。館山湾に沿った町の火事が映っているにちがいないのです。いろいろな噂さが人々の口から伝えられました。北條辺の震災のよほどひどいこと、金谷では石切人夫が石と共に崩れ落ちて行衛のわからなくなったこと、地面が裂けて潮が吹き出していると云うこと、すべて怖ろしい話ばかりでした。夜の十時頃になってうす白い月が出ました。そして満潮になるにつれて海の波の音がいつもよりは著しく高く聞こえて来ます。潮のぐあいを気遣って又下へ降りてゆきますと、行き遇う人の話では、潮がいつもよりずっと干ていて、満潮になってもまだよほど海面が低いと云うこと

でした。津浪の心配はまず無さそうですが、併し潮が余りに干過ぎていることは何かの変兆を示しているにちがいないりません。或は地震で地面の隆起があったのかも知れないと思いましたが、これももう少し様子を見なければ判らないことでした。

ここの山へ集った大衆は夜になって稍々落ち着いたのでだんだん四散しました。そして土地に知り合いのない東京からの避暑客などが三十余人残りしました。それにこの土地での心易い人たちを加えて五十余人はいたでしょう。どうせトタン屋根の下だけでは場処も狭いし、それに絶えず余震が来るので、私たち数人は藤椅子を外へ持ち出して、終夜話しあかしました。夜が更けるにつれて本当に異常な災変であったことが人々の頭にしみじみと考えられました。東京あたりは どうであったか、まるでわかりませんが、きっと多少の被害のあったにちがいないことを想像していました。いつもは人通りもない下の県道を今夜はしきりなしに提灯のゆき通うのが見えます。けれど折々来る余震の外には夜はひそかに静まって、自然はすでに今日の出来事を忘れたかのように しんとしていました。秋の虫の声も地震などと云うものには全く無関係なように、私たちの周囲に充ちていました。大きな大きな自然の眼からは それは何でもない微細な出来事に過ぎないのかも知れません。

翌る九月二日の暁が白みかかる頃、私たちは家の傍らの

小高い丘から海面を眺めていました。潮はいつもよりもよほど干て居て、平常は水面下にあつて白い浪だけが時々見える平島というのがくろく姿をあらわしているのです。東の方から薄雲の間に太陽の上りかけるのを見ていますと、それが真紅の円板のようにまるで光輝を放たない色紙のように見えます。ずっと高く上るのを待っていても、やはり同じ様に光りません。私は斯う云う太陽をよくロンドン冬の冬の煤煙を含んだ濃霧のなかに見かけたことがあります。丁度この朝の空にはたくさんの塵埃があつたにちがひありません。

「何と云う妙な太陽だろう」とみんな不思議がつて空を眺めました。昨夕の黒い雲も何か之と関係があつたのかも知れません。その黒い雲の下に丁度東京の方角に当たつて、渦を巻いた光つた雲が見えたと云う人もあります。そう云う只ならぬ空が私たちに災後と云う感じをしみこませました。いつまでも何となしに曇つた空からは白い灰がちらちらと降つて来るのが見られました。私はひよつと伊豆の大嶋の噴火ではないかと思ひました。それにしても多少の前震を感じるが、また何か異常な音響でも聞こえそうなものだと思われませんが、昨夜あたりの余震のたび毎に西南の海の方から大砲でもうつようなドンと云う音が始終聞こえたと云う人もありますので、或はどこかの海底噴火かも知れないとも想像されました。震源がどこであるかと云う様なことは、もつと諸処の被害状況でもわからない限り、殆



んど見当もつかないのでした。一切の交通途絶のために私たちは只孤立の状態におかれていたのです。

そのうちに専ら横浜がひどいと云う噂さが伝わりました。本牧附近が噴火しているとも云い、横浜は全部海中に没したとも云い、又或る人は横須賀辺りに噴火があつたとも云いました。何でも漁師がその方角に火のあがるのを見て来たと云うのです。けれど火山脈のないところに　そう滅多に噴火が起こる筈はありませんから、之等の噂さも信ずるわけにはゆきませんでした。どうも怪しいのは大島附近ですが、二日の午後になって薄く大島が見えたところに依ると、たいした異状はない様でした。漁師が大島の三原山が低くなつたとか、形が變つたとか　云うてるようですが、それも　はっきりしたものではありませんでした。

比較的遠方から情報を齎した最初の人は恐らく昨夜半上総の青堀から戻つて来た人でした。この人は一日の午前十一時にこの町を発して帰京の途についたとのことでしたが、汽車が青堀へ着くと地震に出遭つて列車の窓からとび出したそうです。もう先へはゆかなくなつたので、ここに残しておいた女連れのことを気づかわれ、すぐに歩いて帰り暫く夜の十二時少し前に、その女連れが私のところに避難しているのを聞いて戻り着いたのでした。途中もかなり被害が多く海岸に沿うた崖が崩れて道路を埋没してしまつたため、路もない山をこえたり迂回したりして、非常な困難をなめて来たと云うことです。海の対岸に二箇所ばかり

大きな火災を認めて、土地の人にその方角を聞いたら、横浜と横須賀とだと云ったそうです。曩の噂さの噴火も多分この火災を見誤ったものでしょう。最後に鋸山へ着いたときは疲れてもいるし、時刻は遅くなっているし、それに海岸の県道は巨岩の崩壊でとても通れぬと云われ、これで汽車の隧道が通り抜けられなかったら どうしようかと心配したそうですが、一心に隧道を入ると、入口附近や内部に諸処崩れた処があったり、真中で二度ばかり強い余震に遇って提灯を消してしまったときは、全く観念して突っ立っていたと話されました。二十五分かかって漸く隧道を出るまでは生きた心もなかったと云うのは、聞いても怖い程で、本当に決死の場合でなければ出来なかったのにちがいません。

それに次いで二日の夜になって電燈会社の出張所長をしている人がたずねて来られ、白浜で地震に遇って、千倉をまわり、北條那古等を経て今暫く歩いて帰ったと云うことでしたが、それらの地方の惨状をもの語られました。これで房州一帯がひどい被害地であることが確実になりました。東京も火災を起したと云うことは先ず船の上で見たと云う話で判りましたが、三日の朝になって、ここから一日の朝の汽車で立って市川で地震に遇い亀井戸まで歩いて行つたが、火事その先へはどうしても入られなくて戻つて来たと云う人によって、本所辺の極端な惨状が伝えられました。またもう一人は横浜で或る船の上で働いていた人で、地震

後陸上へ行つたが、とても居られなくて、富津への船便をたよつて帰つて来たと言うので、尚ほ一層ひどい横浜の事情がもの語られました。火災のための焼死者の惨酷な有様には、みんな顔をそむけずには聞いていられないのでした。それにしても、この町が全壊に近かつたとは云え、火の起こらなかつたことは、どれ程幸運なことでしたらう。倒壊後燃え出した家も数ヶ所はあつたそうですが、大事にならぬうちに皆消し止めることが出来たのだそうです。

斯う云う諸所の事情が少しづつわかつて来ますと、東京地方から来ている人達も、こちらでひどい災難に遭逢したと思つていたのも、却つて東京にいるより幸運であつたのかも知れないと云う安心を得ましたが、同時に一刻も早く帰つて親族知己の安否を知りたいと云う気になり、帰京の方法を計画することになりましたが、それは容易には出来ないように思われました。そのうちに横須賀の火は海軍の重油タンクの爆発であつたと言ふことや、東京その他の火が多く朝鮮人の所業によると云ふこと、そのために鮮人は続々捕縛して殺され、なかには鮮人と見誤られて殺されたものさえ数多いと云ふことなどが伝えられ、人心洶洶として、どうなることかと危ぶまれる程でした。やがて東京の簡単な情報が停車場に掲示され、又四日の夜には三日付の二面の東京日々新聞を持って来た人があつて始めて詳しい報道に接することが出来ました。

余処の事情に対する噂さと共に、町の人々は遇うたび毎

にこの町の惨話を繰り返します。どこそこでは四人の圧死者が出たと云うこと、何々屋では若いおかみさんが金庫の下になって死んだと云うこと、病人の夫に死なれて、夫の弟の家に避難して来ると、夫を殺してなぜ自分だけ助かったと責められると云うような可哀想な話、それらはいつまでも尽きないことでしょう。観音寺と云うお寺の後ろの広場に天幕を張って、たくさんの重傷者が収容されているのを見ると憐れさが湧きます。この小さな町で死んだものが五十余人にのぼるそうです。それでも出遭う人のうちに多く屋根の下に這入ってしまいながら、怪我也せず助かったと云う人達がかなりに在るのを聞くと、寧ろ不思議におもわれる程です。生きようとする本能は私たちのすべてに異常な力ではたらいています。私たちはそれにたよることによって、あらゆる困難に打ち勝つことが出来るのです。併しそれと共に私たちは、お互いに助け合わなければなりません。今度のような非常な災害をうけた場合には自然に心からの親切を尽くすと云うことが行われたのを私たちは屢々見ました。けれど、それがいつまで続くことが出来るのでしよう。また平生にそう云うことが何故少ないのでしよう。それは勿論めいめに自立の出来るようになりさえすれば、直接に助け合う必要が少なくなるからでもあります。併しそこには尚、深く考慮されなければならない事情があります。自分のより安楽な生を欲するがために他を圧迫しなければならぬと云うことです。謂わゆる平和の闘

争、それは考え様によつては更に悲惨な事柄でなければなりません。只私は斯様な事情も適當なる社会的組織によつて避け得られる充分の可能性をもつて居ることを信じたいと思ひます。そしてその組織が實現せられるまではせめても私たちはお互いの心のなかに出来るだけの愛を準備することによつてこの鬭争から幾分でも遠ざからなければなりません。現時の階級鬭争の鬭士等はずと人間心の根本に立ち入つてその適宜な解決を求めなければなりません。

三日目頃からポツポツと町の壊れ家の片付けが始まり、道路の通行に差支のない程度になりました。人々の寝起する天幕張りが暫くは諸処に見られました。食糧品などの不足が懸念されましたが、白米は幸に町役場の臨機の処置で不自由なく供給されましたし、又農家からは牛乳の処分に困つて之を町に寄附しましたので、私たちもその配分を受けることが出来たのは有り難いわけでした。避難の人数が多いので三食とも最初は全く握り飯だけですませていました。そのうちに知り合いの人たちが諸処を探して幾分の副食物を得られるようになりました。始めて味噌汁をつくつて啜つたのは五日目の夕方でした。有り合わせのすべてがそのときには珍味佳肴であつたのです。

地震は二日目の正午にかなり強いのがありましたが、それでもだんだん遠退くと共に弱まりましたので、五日に驟雨が降り出したのを機会に暫く家のなかに入りました。

壁土がざらざらと 床におちていたり、箆笥や書棚が倒れていたり、まだ取りつけてなかった重い暖房鉄管が横倒しになっていたり、当時の激しい揺れ方を思うと、ぞつとする程でした。併し幸に建てつけは一ヶ処を除いてちつとも狂いも しなかったのです。家に入ってから折々の震動に恐怖を感じてあわて出すことも屢々ありましたが、もう危険はありませんでした。昼は飛行機が視察のために空低く飛んでゆくのが数度見られましたし、又駆逐艦が港へ入ったこともありました。鉄道線路を歩んで東京から帰つて来る人が随分ありましたが、女子供づれの 可哀想なもの かなり見かけられたと云うことです。汽車は間もなく途中まで通ずるようになりましたが、この町へ来るのはよほどの日数が要る模様でした。

ともかく人心が極度の不安に陥っていたことは事実でしたから、東京の様子などが漸次詳しく伝えられるに従つて、今更にその惨憺たる有様におびえ、朝鮮人に対する警戒なども口々に言いはやされ、なかには猟銃などを用意するものさえありました。あの突差の際に朝鮮人が、たとえば どんな陰謀があつたにしても、それを実行するだけの余裕があつたかどうか疑わしいわけで、殊に彼等がこんな地方にまでも荒らしに来るなどとは とても信ぜられなかったのです。したが、それでも当時の民衆の神経過敏さは そんな理由を超越していたのでありましよう。現にここに避難していられた或る文士の人が三人づれで帰京する際にも、途

中で梢々髪を長くしていたと云うわけで朝鮮人と疑われ、役場の証明書を見せても信用されず、恐ろしい危険な目に出遭ったと云うことでした。たくさんの虐殺が行われたというなかには、半ば弥次気分で、こんな機会でもなければと残忍本能を満足させたものもないとは云われませんが、又多くの人たちは本当にいいことをしたつもりで、国賊を除いたと信じていたことでしょう。彼等は併し少なくともこの災禍に際して全く聡明を缺いていたのでした。その心情は寧ろ憐れむべきものであると思われませんが、只そう云う人たちの数多くあったことに就いては慨嘆せずにはいられません。

もう一つの民衆の愚かな危惧は、大震以後の地震豫言に對してあらわれました。この町でも誰が云うとなく、何日の何時にはまた激震が来ると云うことが噂さされました。しかもそれがいつも私の言葉として広められたことには喫驚させられました。私の処の避難者が町へ行つてはよくそんな噂さを持って来ました。また或るときには町を歩いている私と行きちがった人たちから、

「今夜あなたが大地震があると仰しやったそうですが、ほんとうですかい」

などと聞かれました。私はそんなことを云った覚えはないし、またそれは今の地震学では時日などを予言することは出来ない。それ位なら一日の地震だって最初からわかりそうなものではないかと答えるより外にありませんでした。

真摯な罹災者たちを　こんな悪戯で脅かそうとするのは、  
何と云う卑劣な心でしょう。私は只そうした噂さの余りに  
度々なのに驚き入りました。

M旅館の人たちと出遇うと、いつも地震当時の危なかつた話が出ました。表二階のつぶれたのは随分早かったのです。そしてその前の往来には石塀や門柱の崩れたのが一杯に散らばっていたばかりでなく、向う側のお宮の大きな石の鳥居が折れ倒れて往来に横たわっているのです。私はどこの隙間に転倒し又立っていたかを思うと、怪我のないのが全く不思議に思われます。その他の人たちも能くも安全であつたと顧りみられます。私のそのとき傍らにおいてあつた雨外套も麦藁帽子も何の損傷もなく取り出されました。転んだとき　とぼして眼鏡でさえ、後で潰れ家の軒下あたりから見出されたそうですが、中央から二つに折れて一方のレンズが外れてしまっただけで、レンズも壊れず、縁の折れた処を知り合いの齒医者に頼んで接いでもらつて、その儘用ひられたのでした。すべてが幸運と云えば　それでもありました。もと私の住んでいた家は　めちゃくちゃに潰れたのに、丁度新しい家が出来たばかりで、しかも無事であつたことは、災後どんなに仕合わせであつたかわかりません。それがなかったなら多くの避難者を容れることが出来なかつたのは勿論、私たちも露営生活をつづけなくてはならなかつたでしょうし、そうなれば　健康



を維持することも難しかったかも知れません。M旅館の主人と主婦の怪我也じきに癒りました。その隠居のお婆さんも地震の前日浦賀から東京へ行つて遭難したそうですが、しかも最もひどい本所に居りながら、上野へ避難したために生命は安全だったと云うことでした。

「まあ何と云うことでしたらうか。地獄のようなひどい目に遭つて来ましたよ」

と云つて、お婆さんは十一日に帰つて来て、その際の恐ろしかった話をされましたが、それでもやはり幸運であつたのでしよう。一週間ばかりの露営やら、それから此処までの不自由な旅にも割合に疲れもなく元気でした。ただ自分の家の新築の裏二階ぐらいはせめて助かっているだろうと思つて帰つて来たのが、それもだめであつたと話されるときにはさすがに老年の気を落としたように見受けられたのは尤もなことでありました。

「それも私の愚痴かも知れますまい。五十年まえに私もが商売を始めましたときには、それこそ何にもなかつたのでございますから。この頃こそ贅沢になつてそんなことを申しますが、なに以前のことを思えば何でもございません」

とお婆さんは静かに云いきりはしましたものの、心のなかには人知れない涙をもたれたことでしょう。

私の家への避難者は法学士や銀行家や、そお云つた知識階級の人たちが多かつたのでした。旅館や下宿にいたのが

潰されてここに逃げて来られたのです。若い夫婦に子供づれと云うのがたくさんでした。埼玉の富有な農家の老人と、やはりおなじ埼玉のお婆さんが中に交っていました。手が足りなかったので、それらを一組にして自炊してもらうことにしましたが、これらの生活も遭難の記念として長くその人達の記憶に残ることでしょう。お婆さんは毎朝丘の上で日の出を拝し、南無妙法蓮華経と声高く連呼しているのが常でした。

十五六日頃には之等の人たちは皆それぞれ東京や郷里へ向って帰ってゆきました。その外の寄寓していた人たちもだんだんに居なくなつて、その後は今までの混雑に引きかえて急に寂寞に戻ってしまいました。隣としては、まるで無い丘の上の只一棟の家が静かな自然のなかにぽつりと残されました。畑仕事に頼んであった爺やさえ暇とって帰つた後は私とY子と幼い女中とだけになったのです。暴風雨が二度ばかりひどく来たときなどは、さすがに心細い気がしました。後ろの山の松の樹が今にも折れようとするばかりに音を立てて鳴ります。風に圧されて二階がぐらっと揺れ出すときは、またどうなることかとさえ思われるのでした。地震で幾らかずつて居たのかも知れませんが、その暴風雨の夜半に二階の屋根の端の瓦がずっと並んで、ぐわらぐわらと落ちたときは、恐ろしいようでした。

「この家の下の方がつぶれてしまつたんですよ」と、その只ならぬ音を聞いて、Y子は私に抱きすがりまし

た。

「大丈夫だ」

と私は強いて、それを安心させようとするより外ありません。私達は地震以来の恐怖の心もちを、まだ持ちつづけていたのです。その翌る日は晩秋の暖かい日がこの丘に充ちていました。私達は自分の最善をつくして私たちの生命を自然に委ねるより外はありません。

それから土に親しもうとして私達は暇々に自分の手で畑をつくろうとしました。菜を蒔いたり、苺の苗を植えませんでした。朝起きると、すぐに

「菜っ葉を間引いてまいりましょう」

とY子は私と一緒に籠をもって畑へ出たりします。そして「もう間引くなんて言葉を覚えましたのね」

と二人で笑うのでした。

地震の後、火事を免れたお蔭で、この町には当分は生活の必需品だけはありました。長く汽車が不通であつたりしたために、一ヶ月ばかりの後に、砂糖や油やその他の食糧品が不足して来ました。併し、それも間もなく補充されるようになりました。余震もこの頃は殆んど感じなくなつて来ました。汽車の汽笛の音を久しぶりに聞いたのも、もう半月ばかり前のことになりました。そして潰れ家の跡へも幾らかずつは新しい建築工事が始まりました。こうして未曾有の震災の創痕もだんだんに減らされてゆくことでし

よう。それでも私たちの心の深くに刻まれたこの遭難の事実は依然としてあらわに残って居り、そしていろいろな事柄に現れて来ます。希わくはこの体験が永久に失われないで、私たちにいつも生きてはたらいて欲しいではありませんまいか。丘の上から見亘すと、まだ刈り残された黄いろい晩稲の平面を超えて、鋸山の背には無残に剥ぎ取られた赭裸の崖が数ヶ所見えています。浜辺へ出ると海水が減ったように砂浜が著しく広くなり、もと見なかった黒い岩の一行が海中に怪しげに立っています。この辺の土地は五尺ばかりも隆起したのでしょうか。本当にこんな地変は滅多には来ないことでしょうか、併し私たちはいつも之に処する途を考えておかなくてはなりませんまい。

今度の災変に際していろいろの事が起こり、そして又論ぜられています。先ず第一に復興への手段として節約と云うことが叫ばれました。傍に惨苦を経て困窮に泣いている人たちがあるのに、自らあり余る贅沢を尽すということのわるいのは云うまでもありません。けれども私たちは節約それ自身が無条件にいいと思つてはならないのでしよう。窮者の生活に必要な品物を、一方にそれ程の必要もなしに費消すると云うことは、直接に窮者をして益々苦しめる点に於て、してはならないことです。生活必需品の配分はどんな場合にもすべての人に均等になされねばならないことであり。そしてその缺乏はまたすべての人が均等に堪えなければならぬことなのです。之に關聯して　そう云う

品物に対する暴利を所得しようとして企てる者は、かような災変に際して特に最も憎むべき心の持主であると思ひます。社会としては恐らく斯種の品物の商売を個人に委ねることが適當の制度ではないのでしよう。寧ろすべて公供的に之を供給する様にしなければなりません。若し夫れ生活必需品以外のものに関しては、その本質に於いては自らの余力によつて之をその欲する儘に使用することに差支えのない筈のものであります。ただ私達の精神生活により必要なものを先にし、そうでないものを後にすると云う意味で或る程度の節約があり得るだけです。人間全体の生活は却つて種々の品物をそれぞれの役目に対して欲求する事に於いて進歩することが出来るのであつて、私たちの文化の目的は正當にここに存在するのです。これなしには復興も文化もない、原始生活に帰るでもありません。災後の復興を志すためには私たちはこの点に於いて寧ろすべてに対して節約なる消極的の行為よりは、もっと積極的でありたいと思ふのです、私たちは只併し現時の社会制度に於いてにわか之に急ぐことを差し控えねばならない理由を見出すのです。それは災厄を蒙つた人たちに徒に羨望を起し、不平を抱かしめるからであります。なぜなら災厄の結果は餘儀なしに極めて著しい不公平をそこに現するからです。節約はこの不時に生じた不公平に対して同情し遠慮しなければならぬと云う意味で必要になるのです。それですから之は本質的なものではなく、却つて社会の現制度の欠陥による

のであつて、私たちにこの際それを痛感せしめずにはないものでしょう。私は思います。自らの招いたものでない物質的災厄は社会的に常に正当に償わなければならないものであると。社会は即ち公共的にすべての天災に対する充分なる保険を営まなければならないのです。之が罹災者に対する社会の正当な同情であり救助であります。個人の恩惠的同情、即ちいわゆる慈善は決して物質的のものによつて目的を遂げられてはなりません。それは只お互いの暖かい心によつて慰め合われなくてはなりません。何ものにも代え難い尊い人間愛の価値が斯様にして始めて物質を超越してあらわれ得るのです。私たちは物質的贈与によつて代表せられた恩恵を決して高く見積つてはなりません。之を施すものと受けるものと、等しく社会の一員であつて、それがために高下の差別がつけられてはならないからです。若し上述のような損害填補の正当な方法があるならば、一時の救恤給与による怠惰と云うようなことも起きずにすむでしょう。なぜなら給与が引き続いて必要な人達は自らの勤労能力をもたない少数のものに限るわけであり、そしてそれらの人達には怠惰とか勤勉とかはあり得ないからです。勿論合理的な社会は勤労能力を有する人々にはその勤労を用いる相当の場処を与え、そして之に対して最小限度に於いても彼等の生活に必要なだけの報酬を与えなくてはなりません。只災禍のためにいろいろな機関が破棄されたために一時の失職を免れ得ない人達はあるかも知れません。

之等に対しては社会は恐らく適宜の臨機の処置を見出し得るでもありません。

災後に諸処に起った朝鮮人殺戮問題、並びに大杉氏等殺害問題は、民衆一般の思想的教養の欠除を暴露するものでした。若し彼等が朝鮮人をよく理解することが出来たならば、そして又自分たちの社会的制度に信頼することが出来たならば、恐らくはあの混乱の際といえども、今少しく落ちついた処置がなされたでしょう。又個人を殺害することによって思想そのものを滅ぼし得ないことに気づいたならば、後者の如き問題も生じなかつたでもありません。現時の民衆の多くがまだまだそれらを解することに遠いのを私たちは感じなければなりません。

この外のいろいろな社会的事件に対しては 私はもはや言葉を費しますまい。私たちは もつと思想的に深い教養を経なければなりません。それと同時に私たちは 亦 宗教的にも科学的にも進まなければならぬことを私は感じます。浅草観世音の御利益を祈るなどと云うに至りては 偶像崇拜の極に陥っているものです。たとえ殿堂が壊れ若しくは焼けたとしてもその物質的損害は宗教的の意味に何の関するところもない筈です。それと同様にこの災変が幾万の人命を滅ぼし巨億の財貨を失わしめたとしても、之を天譴とか天誡とか解することは、恐らくは神の真意を曲げ私するものではありませんまいか。